

研 究 成 果 報 告 書

きとう ゆういち
佐藤 優一

柏崎市立鏡が沖中学校 教頭

平成3年3月修了 教科・領域教育専攻社会系コース

災害史に関する地域素材を用いた教材開発

1 はじめに

(1)研究の事由

地震列島の日本においては、今日まで多くの自然災害が発生してきた。近年においても、東日本大震災が発生し、多くの犠牲者を出し、人々の生活を奪った。地震・津波災害に限らず、洪水・土砂・雪災害なども毎年数多く発生している。新潟県においても、2004年の新潟県中越地震や2007年の新潟県中越沖地震が記憶に新しい。自然災害の発生に備え、学校教育現場においては、各校で避難訓練の工夫や防災教育の充実が図られ、自助・共助に関する能力の育成が図られている。新潟県では、『新潟県防災教育プログラム』（2014年）が発行され、全小中学校で活用されている。市町村においても独自の資料開発が行われているところもある。学習指導要領等においては、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に学習内容が位置づけられている。例えば、中学校社会科地理的分野での自然災害に関する単元などで実践されているが、子供たちにとってより身近な通学区域に関する教材の開発例が少ないことが現状である。

通史的、広域的に史料を分析した数多くの研究成果、各地域における代表的な災害史の教材化に関する書籍、内閣府『災害史に学ぶ』等の政府刊行書等、防災教育に活用できる書籍は数多く出版されている。これらをもとに教材開発を行うことは可能であるが、取り上げられている災害事例は、生徒にとって身近ではないものが多い。中には、大きな災害を他人事と捉えてしまう場合もあることが予想される。そうではなく、生徒が生活する場に視点を当て、災害に遭遇しても、克服してきた歴史があることを伝え、感じ取らせることが、自然災害への関心を持たせ、自ら命を守り、他に働きかける意欲・態度の育成につなげることができると捉える。寒川旭氏は、『災害史に学ぶ 内陸直下型地震編』（2011年）の中で、「過去の地震から教訓をくみ取って現代に活かすことが、将来の地震被害を軽減するための第一歩なのです。」と述べ、重要性を指摘している。

長岡市においては、全小中学校等に『まちづくり市民研究所第I期報告書 みんなでつくる防災教育体制』（2013年）が配布されている。私自身、研究員として報告書執筆に関わった。その中で、どの小中学校でも使える地域素材を用いたワークシート例を紹介した。当時、より適切に史料を分析し、どの中学校でも実践できる教材開発を行いたいと思った。本実践は、長岡市を旧市町村ごとの災害史に焦点をあて、各中学校の地域素材に関する教材開発を行い、小冊子にまとめた。小冊子名は『災害史における地域素材を用いた教材例』である。その中で市町村史や市史双書等を用い、旧市町村における中学校別に教材活用例を示した。教職員が使いやすいよう出典、該当ページ、活用理由を記した。さら

に、『御付録』『青柳三郎「年中気候日記」』という一次史料の教材化にも取り組んだ。小冊子の構成は、作成の意図、活用資料、資料収集方法、各中学校における災害史の活用例、中学校展開例などである。なお、本書中における史料の掲載にあたっては、長岡市立中央図書館から許可等をいただいた。

(2) 先行研究

災害史においては、数多くの研究成果が存在する。北原糸子編『日本災害史』(2006)寒川旭著『地震の日本史』(2007)磯田道史著『天災から日本史を読みなおす』(2014)高橋裕著『川と国土の危機』(2012)など広域にわたり通史的に史料を分析した書籍がある。これらは、書店での購入や図書館での閲覧が容易であり、教職員が手にとって教材として用いやすい。新潟県の事例も数多く紹介されているものがある。例えば、知野泰明氏は『日本災害史』において、長岡市を流れる信濃川の災害と治水についてふれている。武村雅之氏は『地震と防災』(2008)において、中越沖地震と原子力発電所についてふれている。寒川旭氏は『地震の日本史』において、県内の状況について数多くふれている。863年の地震、江戸時代の高田地震、三条地震、1964年の新潟地震、2004年の新潟県中越地震、2007年の新潟県中越沖地震等である。高橋裕氏は『川と国土の危機』において、信濃川の治水という視点で取り上げている。環東アジア研究叢書1『環東アジア地域における社会的結合と災害』(2012)では、水害に翻弄される長岡が記載されている。鈴木牧之の編撰『北越雪譜』(1936)でも「雪類人に災す」「雪中の洪水」等を絵入り文書で記す。これらの文献に中学校区近隣の事例が取り上げられているとしたら、教材として扱いやすい。学習指導案や指導過程を紹介するものも数多く出版されている。例えば、檜垣大輔ら編『土砂災害と防災教育』では、土砂災害を主な対象に防災教育の実践集を作成している。コラム「歴史教育を防災教育に活かす」として今村修正氏が高田地震による土砂災害を紹介している。岩田貢・山脇正資編『防災教育のすすめ—災害事例から学ぶ—』では、地理的な視点から教育化を行っている。高橋和雄編著『災害伝承 命を守る地域の知恵』など各地域における代表的な災害史の教材化に関する書籍もある。『新潟県防災教育プログラム』は、平成26年には「津波災害編」「地震災害編」「洪水災害編」「土砂災害編」「雪災害編」が、平成28年には「原子力災害編」が県内全小中学校に配布された。学習指導案、ワークシート、画像資料等で構成されている。動画やワークシートに工夫が見られ、児童生徒が比較的関心をもって取り組めるよう工夫されている。また、教職員にとっても必要な教材を選択し、活用できる点で用途は広い。小中連携教育の一環として継続的に活用している実践もある。私自身、勤務校で防災教育の担当または支援的立場で実践を積み重ねてきた。さらに、平成25、26年には、まちづくり市民研究所第1期研究員として、長岡市の次世代を担う若者の防災・減災意識の向上を図り、関与する市民の防災・減災の更なる向上にも寄与するプロジェクト運営の方法を検討してきた。ディレクターは、長岡造形大学の沢田雅浩准教授(当時)である。また、研究員任期終了後も、長岡市の全小中学校で用いる実物教材の開発を一部の研究員とともに検討してきた。

(3) 本実践で教材化した資料

主として3つの資料を活用した。第一に市町村史である。旧市町村ごとに市町村史が編纂されており、必ず災害の記録が載っているからである。第二に市町村史に関する研究書や郷土誌等である。市町村史における記載内容を掘り下げて記載されているからである。第三に一次史料として『御付録』『青柳三郎「年中気候日記」』の教材化を試みた。何より一次史料であり、当時を物語る記録にほかならないからである。

2 各中学校区における使用教材例

(1)活用資料の選定について

長岡市は、平成 17 年 4 月に当時の長岡市、中之島町、越路町、山古志村、小国町、三島町が合併した。平成 18 年 1 月に当時の長岡市、和島村、寺泊町、栃尾市、与板町が合併した。そして平成 22 年 3 月には、当時の長岡市、川口町が合併し、現在の長岡市を構成している。合併前の旧長岡市には市立が 16 校、国立が 1 校設置されていたが、旧長岡市以外の旧市町村には、合併時 1 校しか設置されていなかった。よって、合併前の旧市町村単位で使用教材例を提示するとともに旧長岡市においては、1 中学校区に絞らず、全体としてより活用できる資料を教材化した。

(2)旧市町村ごとの教材例と活用理由

①旧長岡市（17校）

ア『長岡市史』を用いる場合

『長岡市史通史編上巻』『長岡市史通史編下巻』を用いる。『長岡市史通史編上巻』には、大火、洪水、暴風雨、雪、地震などの記録が数多く記載されている。特に洪水発生が多く記録されている。また、大火による焼失戸数の多さが目を引く。江戸時代の防火施設の未整備が大きく影響していると思われる。『長岡市通史編下巻』には、明治以降の災害の記録が細かく記載されている。大火、洪水、豪雨、雪、地震などである。特に洪水災害発生時の堤防決壊や床上、床下浸水戸数が記載されている。雪害による死者数も多い。

イ『長岡市史双書』を用いる場合

ここでは、『長岡市史双書N024 専福寺諸事見聞雑記』（1993年）および『長岡市史双書N047 蔵王権現領安禅寺御用記(3) 御用記（正徳5年～明和9年）』（1993年）を用いた。『長岡市史双書N024 専福寺諸事見聞雑記』は、専福寺住職俊了が主に記録した物で、当然のことながら、どの巻にも東本願寺とその門末、専福寺自身にかかわることが多く記録されているが、天災や火災などの記録も詳細であると記載されている。雪、大水、火事、一揆や三条地震、高田地震等が記載されている。三条地震については、長岡市に比較的近い三条市で発生した地震であり、長岡の様子が記されている。例えば、「同子年大地震ニ付、椿沢村家数百三拾軒程之处、立家六軒死人ハ式拾式人、田井村家数百二十軒之处、皆潰死人三拾七人、和田村・時水村両村ニ而家数五拾六軒程之处、皆潰死人十七人、太田村家数六拾之处、立家五軒死人拾七人、其外潰レ候事数を不知、長岡北組計リニ而本潰千八拾五軒、半潰レ四百二十五軒、即死百八拾六人、怪我百四十五人」である。高田地震は、「同四未年4月25日夜八ツ時より大地震入、27日夜迄入申候、高田町四千間程潰レ、寺方も大方潰レ申由、人死事1700人余と申事、上ハヤタチ山崩レ五百人余死ス、夫より一里通りぬけ有間川是も一宿不残潰レ、其外高田在家潰申候事其数を不知、高田御防も食堂潰、中嶋泉光寺庫裏廊下ともニ潰れ」とある。『長岡市史双書N047 蔵王権現領安禅寺御用記(3) 御用記（正徳5年～明和9年）』では、享保16年に起きた洪水の様子が記されている。「5月26日の夜から大雨になり、越後は大洪水になった。27日朝5時（午前8時ころ）には長岡城へ舟で出入りし、9時（正午ころ）過ぎから水が増し、橋や家が流れ、死人は数知れないほどであった。しかし、蔵王領では家が流されたり溺死者が出たりする被害はなかった」とある。ほかにも、洪水災害の様子が多く記載されている。

ウ『関原町史』を用いる場合

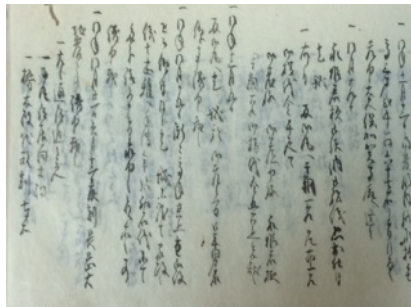
関原中学校は、合併前から長岡市であり、青葉台中学校、西中学校等と隣接している。ただ、昭和に入り2度の地震に見舞われていることから『関原町史』を活用した。昭和2年10月に発生した関原地震や昭和36年2月に発生した長岡地震がある。2つの地震の震央にあたると思われる地域である。生徒にとって身近な地名（宮本・関原・日吉や火振り坂など）が数多く記載されているとともに、当時の証言が取り上げられている。長岡地震では、「信濃川左岸の全壊率50%の被害があった。死者5人、全壊257戸、半壊439戸に及んでいる。」などである。

エ『御付録』を用いる場合

『御附録 自忠寛公至忠雅公』（長岡市立中央図書館蔵）及び越佐叢書第14巻、『御附録 自後忠成公至忠利公』については越佐叢書第13巻を用いる。なお、『御附録 自忠寛公至忠雅公』原文は現存しているが、『御附録 自後忠成公至忠利公』原文は、現存が確認されていない。矢田俊文氏は、講演会記録「災害の歴史に何を学ぶか～地震・津波・洪水と長岡藩主牧野家の記録～」で、次のように語っている。「附録に記載された水害は63件で、地震は3件の報告記事しか載っていません。めったに起こらない地震災害を研究して何か意味があるのか、たびたび起こる水害の研究の方が重要なのではないかと思われるかもしれません。しかし、災害はその性格に違いがあります。（中略）江戸時代に信濃川をコントロールすることはできませんでした。地震の死者数は他の災害に比べて多いことがわかります。」と、圧倒的に地震災害の被害の大きさがわかる。主な地震災害として二例を取り上げた。一例目は、文政11年（1828年）に発生した三条地震である。「同年同月廿一日、去月十二日辰刻、長岡大地震之事譜中載之。一、左之通注進之覚 一、本丸住居向大破 一、櫓大破、地形割七ヶ所 内、壺ヶ所地形崩傾 （中略） 一、家中潰家式十七軒 一、山崩六百六十五ヶ所 一、信濃川岸崩八百十三間 一、死人四百四十式人 内 男百九十八人 女式百三十九人 僧 五人 一、怪我人五百五十式人（中略）右の外、地裂、砂埋、山崩等二付、所 致変地場所も有之段達之。」とある。情報網が未整備であった当時、長岡地震と記載しているが、よほど大きな揺れに見まわれたことが容易に予想できる。授業では、原文資料については提示するのみとし、漢字から破損状況を確認させたい。二例目は、寛延4年（1751年）に高田で地震が起き、長岡でも被害があった高田地震である。「一、寛延四未年四月廿五日夜、地震之事譜中載之。一、注進左之通、五月二日、月番老中堀田相模守殿へ差出之。越後国長岡私領分、去月、廿五日丑刻地震二付、領内潰家・田畑破損之覚 一、潰家 七十三軒 一、半潰家 五百六十式軒（中略）一、即死 女式人 （中略） 右之通御座候。城内并侍屋敷別条御候。此段御届申上候。以上 五月二日」とある。



『御附録 自忠成公至忠雅公』



長岡市立中央図書館所蔵

②旧越路町（越路中学校）

「雪しろ水」という雪解け期の洪水災害に関する資料を活用する。特に『越路町通史編下巻』に来迎寺駅前の様子が写真として掲載されており、印象的である。越路地域もまた、水害の歴史を繰り返していることを『越路町史通史編下巻』の「明治期の洪水記録」や『越路町史通史編上巻』の近世における洪水絵図を用いて授業構成する。

③旧小国町（小国中学校）

『小国町史』は、災害自体の記録が比較的に少ないため、『長岡市史双書N049 新潟県中越大震災と資料保存(2)被災資料が地域を語る①刈羽郡桐沢村青柳家文書』を併用する。その中に『年中気候日記』という貴重な史料が掲載されている。現在のところ未整備であるが、活用した。旧小国町は、合併前、柏崎刈羽地域に属していたが、長岡市に合併された地域である。いずれも洪水に関する



記録が占める。

『青柳三郎「年中気候日記」』 長岡市立中央図書館所蔵

④旧三島町（三島中学校）

三島地域は、昭和36年の「長岡地震と蓮花寺地すべり」、「8・5集中豪雨」「第二室戸台風」を『三島町史上巻』から活用する。「長岡地震と蓮華寺地すべり」は前述した旧長岡市の関原地域周辺とのかかわりや蓮華寺という地名が記載されているとともに雪解け水と地震とのかかわりが災害を大きくした例として取り扱える。「8・5集中豪雨」は、12時間での降水量が338mmに達する豪雨であり、死者も出たことに着目させることができる。「第二室戸台風」では、「地べたにすわる屋根 三島 杉の大木も根こそぎ」というタイトルが目を引く。

⑤旧与板町（与板中学校）

長岡市北部に位置する与板地域における最大の被害事例は、『与板町史通史編上巻』の「文政大地震の発生」である。文政11年（1828年）11月に発生した文政大地震（三条地震）は、与板中心部で多くの死者・負傷者を出した。家屋の焼失、倒壊も多く記録されている。「与板災害年表」も活用できる。

⑥旧和島村（北辰中学校）

和島地域も水害事例が占める。昭和36年の8・5集中豪雨を取り扱う。村始まって以来の大きな被害をもたらした。村の総戸数の6割が山間地に位置しており、いずれも巾100～200mの入り組んだ通称「沢」である。両側に山や丘陵を背にしている集落という事か

ら、地滑り、山崩れによる被害が大きかったこと、また出水による激流は一挙に平地に押し寄せ、桐島小学校から辺から越後線に沿って、妙法寺駅にいたるまでの間を埋没させてしまったことなどを活用する。床下浸水最高2 mを記録した。

⑦旧中之島町（中之島中学校）

中之島地域は長岡市北部の田園地帯であり、刈谷田川等が流れる。近年では、平成16年に「7.13水害」が発生した。7.13水害に関する記録は、多くは写真記録集で報告されている。よって授業実践も多いと予想される。『中之島町史下巻』では、昭和期の繰り返される水害の記録を伝えている。特に昭和36年の8・5水害では、浸水2 mという記録が目に着く。

⑧旧川口町（川口中学校）

新潟県中越地震の震央がある川口地域は、多大な被害を出し、現在はきずな館という学習施設がある。また、報道記録集や復興に関する書籍も数多く出版されている。ここでは、中越大震災以外の資料を紹介する。『川口町史』には、「川口町は魚野川・信濃川の二大川の流域に沿っている上に豪雪地帯を上流にひかえているためにほとんど毎年のように雪代水・豪雨による被害を受けている。」と記載されている。近世、近代ともに水害の記載が多い。昭和53年の6・26水害での洪水や土砂崩れが活用できる。また、川口地域は、山間地ゆえの豪雪や地滑りが特徴的である。

⑨旧山古志村（山古志中学校）

中越大震災では、旧村長の判断で全村避難を行ったことは、全国的にも知られている。現在は、あらたるという学習施設もある。また、報道記録集や関連書籍も数多い。特徴的なのは、『やまこし復興』など復興に関する書籍である。本実践では、復興事業を学ばせるのではなく、歴史的側面から学ばせる。『山古志村史』に「雪さえなかったら、こんな良い土地はない」とある。昭和10年の雪崩、昭和36年の豪雪等を取り上げる。6～7 mという積雪の中、生活することの意味がわかる。

⑩旧栃尾市（刈谷田中学校、秋葉中学校）

『栃尾市史中巻』に大正15年7月に発生した洪水災害の記録が生々しく記載されている。写真も多数掲載されており、活用できる。町中心部のみならず農村部の惨状も詳しく記載されている。どの地域に住む生徒にとっても身近に感じる教材となりうる。

⑪旧寺泊町（寺泊中学校）

寺泊地域は、長岡市で唯一海岸部に面していることから、強風による高潮や地震による津波を活用する。高潮に関しては、寛政4年（1792）の暴風雨によるものを活用する。高波により家屋流失8軒、家屋半壊10軒、その他被害を受けた屋敷は10軒であった。津波に関しては、昭和39年の新潟地震による激しい揺れに遭遇した当時の記録を活用する。海岸部の人々は正気に戻ると同時に、津波を心配して一部の人は裏手の山に避難し、また海岸へ出て潮の動きを見る人もいた。役場の記録では津波は1.5 mとされており、寺泊港では、海面と岸壁が同じに見えるほどの水面上昇であった。

3 勤務校における授業実践（柏崎市の場合）

(1)授業における生徒の反応

勤務校における実践として、柏崎市における資料を活用した実践を行った。活用資料として、『新潟県防災教育プログラム 地震災害編』『柏崎市史下巻』桑山省

吾著『江戸時代南鯉石百姓衆の生活』を用いた。授業は、中越沖地震について、写真資料をもとに振り返らせた上で、過去の災害事例を3つ紹介しながら進めた。災害事例としては、洪水災害、雪災害、土砂災害である。活用の意図としては、安政6年（1859年）の洪水災害事例として用いた「鏡月堂日記」は、勤務校の名称や地域の地名、河川名が記載されており、生徒たちが身近なものとして捉えるであろうと思ったからである。「6・26水害」は、床上浸水する市内の様子を提示し、災害後に改修された鶴川の航空写真を用い、写真から判断できる新河川・旧河川を色分けさせ、減災に向けた人々の努力を感じさせた。雪災害事例として用いた「大雪・雪崩」は、昭和2年（1927年）2月に発生した市内田屋地域の雪崩の被害状況を端的に用いた。資料には、20名の犠牲者や住宅の被害状況が記されている。発生地を地図で提示した。さらに地滑りの記録写真も提示した。『新潟県防災教育プログラム』で土砂災害の様子は動画資料で提示済みであるので、想像しやすいであろうと考えた。

柏崎の自然の恵みや魅力を考えさせた上で、授業を進めた。2007年7月16日を新潟県中越沖地震発生日であると知る生徒も複数いた。自然災害の種類についても、地震、津波、洪水、土砂などある程度知っている。しかし、地域でおきた過去の自然災害事例を知る生徒は皆無であった。ここに歴史的資料を用いた授業の存在意義があると感じた。授業をとおして生徒は、街の復興、災害に対する備え、災害に対してできることを記した。「柏崎で過去に起きた災害事例を知り、感じたことは何か」という問いに対して、「意外と大変なことが起こっていてびっくりした」など初めて知る情報に驚く生徒ばかりであった。「いろいろな災害があったのに、今は大きな災害あったようには見えないくらい町が綺麗になっている」「かつて起こった災害がまた来るのではないかと不安になった」「普段から自然災害に対する何らかの対策をしておかなければならないと思った」「柏崎は自然災害の多い市だと初めて知った。地震と洪水だけだと思っていた」「身近なところに災害があることを知った」「自分達は何ができるのか考えた」などである。「防災対策として、できることは何か」に対しては、避難経路、災害グッズ準備、ハザードマップ作成、意識を変えること、家族で話し合っておくこと、他に発信するため学校で学び、発表すること、いざとなったら助ける側になることなどを挙げている。

(2) 中学校展開例

「地域の自然災害に応じた防災対策」

① 学習指導要領との関連

社会（2年）地理的分野(2)日本の様々な地域ウ（ア）自然環境を中核とした考察

② ねらい

ア 住んでいる地域の自然の恵みや住み心地の良さを自分なりに再確認するとともに自然災害がもたらす脅威を受け入れる姿勢を持つ。

イ 歴史的資料から身近で起きた自然災害の発生の事実を知り、災害から自分の命を守ることはもちろん、家族や地域の人々を守るために何ができるか考える。

③ 資料活用上の工夫

ア 新潟県中越沖地震の津波についてふれる。

イ 資料に中学校名のもととなっている地名や身近な町名が記載されていることから、身近な地域に関する事例であることを認識させる。

ウ 浸水家屋の写真や河川氾濫後に取りられた新旧河川の写真をとおして、洪水災害の起きやすい地域であることを認識させる。

エ 他の中学校区ではあるが、雪崩や地滑りなどの事例を紹介し、様々な災害が発生してきたことに気付かせる。

④出典

- ・桑山省吾著『江戸時代 南鯖石百姓衆の生活』1991年
- ・柏崎市『柏崎市史下巻』1990年
- ・公益財団法人 新潟県中越大震災復興基金『新潟県防災教育プログラム地震災害編』2014年

⑤ 展開

	学習内容 主な発問	教師の支援	資料等
導入	本時の学習課題をつかむ。 ○地域の良いところを再認識する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題を提示する。 ・今現在住んでいる町の良さを話し合い、郷土の誇り得るものを再認識させる。 	ワークシート
展開	わたしたちが住む柏崎の自然の恵みや魅力をあげてみよう。		
	○2007年に発生した中越沖地震の被害状況等について、知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・写真資料を用い、生活に生じる支障を思い描かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中越沖地震後の様子(写真4点)『新潟県防災教育プログラム地震災害編』 ①潰れた家が道を塞いでいる。 ②歩道にガラスや壁が散乱している。 ③地震後の工場の中。 ④信号が消えている。
	2007年7月16日は、何が起きた日ですか。		
	○自然災害の種類について、確認する。 ○地域で起きた過去の自然災害事例を知ること、災害が身近なものであると感じる。	<ul style="list-style-type: none"> ・既習した知識を整理する。 ・中学校所在地を明確に示す資料(地名が記された資料、地図)を用いることで、身近な問題として興味・関心を高める。 ・被害状況(被害者数、被害戸数等)を明確に示す数値を用いる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「鏡月堂日記」『江戸時代 南鯖石百姓衆の生活』 ・「六・二六水害(昭和五三年)」 ・「鵜川の新、旧河川」 ・「雪害」「地送り」『柏崎市史下巻』 ・柏崎地域図
まとめ	○防災対策として、できることは何か考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいに即した考えを持ってたか評価する。 	

⑥評価

- ・地域の恵みや良さだけでなく、災害と向き合うことが必要であることを理解させる。
- ・身近で起きた自然災害を知り、自分を含め様々な人々の命を守ろうとする姿勢をもつ。

4 終わりに

本実践は、地域素材を用いた災害史に関する教材化の一例である。本実践に取り組もうとした背景には、子供たちにとってより身近な通学区域に関する教材開発を行うことで、教職員が勤務校での実践に活かすきっかけづくりになってほしいとの思いがある。限られた地域ではなく、長岡市全域の中学校で活用できる教材化を試みることで、長岡市における防災学習の充実のみならず、他市町村でも応用可能な実践であることを示した一例としたかった。実践をとおして、生活する場で起きた災害事例を知り、災害に遭遇しても克服していく方法を歴史資料から見付けていく姿勢を生徒に持たせたいと考えた。今後は、授業実践を積み重ね、検証していかなければならない。何より、『災害史に関する地域素材を用いた教材例』として製本化できたことを本実践の現時点での成果としたい。

<引用参考・参考文献>

- ・公益財団法人新潟県中越大震災復興基金『新潟県防災教育プログラム』2014、2016
- ・文部科学省『学校防災のための「生きる力」を育む防災教育の展開』2013
- ・内閣府（防災担当）災害予防担当『災害史に学ぶ 内陸直下型地震編』2011
- ・まちづくり市民研究所『まちづくり市民研究所第Ⅰ期報告書 みんなでつくる防災教育体制』2014
- ・北原糸子編『日本災害史』2006 吉川弘文館
- ・武村雅之著『地震と防災』2008 中央公論新社
- ・寒川旭著『地震の日本史 大地は何をかたるのか増補版』2011 中央公論新社
- ・高橋裕著『川と国土の危機 水害と社会』2012 岩波書店
- ・環東アジア研究叢書1『環東アジアにおける社会的結合と災害』2012 新潟大学人文社会・教育科学系附置環東アジア研究センター
- ・鈴木牧之編撰『北越雪譜』1936 岩波書店
- ・檜垣大輔・緒續英章・井良沢道也・今村隆生・山田孝・丸谷知己編『土砂災害と防災教育一命を守る判断・行動・備え一』2016 朝倉書店
- ・岩田貢・山脇正姿編『防災教育のすすめ一災害事例から学ぶ一』2013 古今書院
- ・高橋和雄編著『災害伝承一命を守る地域の知恵一』2014 古今書院
- ・長岡市史双書N○24『専福寺諸寺見聞雑記付「長岡町奉行月番日記」(延享元年～延享二年)』1993
- ・長岡市史双書N○47『蔵王権現領安禅寺御用記(3)御用記(正徳5年～明和9年)』2008
- ・今泉省三・真水淳編『越佐叢書第十四巻』1978 野島出版
- ・今泉省三・真水淳編『越佐叢書第十三巻』1978 野島出版
- ・長岡市立中央図書館文書資料室『リレー講演会「災害史に学ぶ」記録誌』2015
- ・長岡市史双書N○49『新潟県中越大震災と資料保存(2)被災資料が地域を語る①刈羽郡桐沢村青柳家文書』2010
- ・桑山省吾著『江戸時代 南鯖石百姓衆の生活』1991
- ・『長岡市史下巻』1996・関原町史編集委員会『関原町史』2011・『越路町史通史編

下卷』2011・『小国町史本文編』1976・『寺泊町史通史編上卷』1992・『寺泊町史通史編下卷』1992・『栃尾市史中卷』1979・『中之島村史下卷』1986・『川口町史』1986・『与板町史通史編上卷』1999・『三島町史上卷』1984・『和島村史通史編』1997・『山古志村史』1985・『柏崎市史下卷』1990